それぞれの物語を人形にたくして

文＝森 合音（四国こどもとおとなの医療センターホスピタルアートディレクター）

高橋雅子さんは小さなピンマイクを使う。そして、目の前にどんなに多くの患者さんや医療スタッフが集まっていても、声の量とトーンを変えない。誰かと面と向き合って話す時と同じように、やさしくゆっくりと語りかける。その声をピンマイクが忠実に拾い上げて、可能な限り多くの人にその声を届ける。だから、大きなホールで皆に向かって話していても、誰もが自分一人のために耳元でささやかれているように感じて安心してしまう。

「好きな色の布を使ってね。リボンやビーズやいろんな飾りをつけてもいいね。今日は自分だけのお人形をつくってください」。

その声に、そう、今のこの時間は自分のためだけにあるのだと心のスイッチを切り替える。私の好きな色は？　私が作りたいものは？　何色のリボンだともっと素敵に見える？　誰もが自分の心に問いかけ始める。その瞬間、患者も医療スタッフもその役割を離れて一人の人間に戻る。今、一緒にいるのは人形づくりをする仲間だ。病院に普段とは別の色をした時間が流れ始める。

ワンダーアートプロダクションの高橋さんが当院に来てくださったのは2015年9月の下旬、これまでに全国の病院や海外の病院に「人形づくり」の時間を提供し続けてこられ、その活動は今年で10周年を迎える。人形たちは作った人の手を一度は離れ、旅をしてクリスマスに作った人の元に帰ってくる。素敵な物語だと思った。そして、シンプルなその物語を10年間紡ぎ続けてこられた高橋さんの強い信念に胸を打たれた。

「みんな自分を表現したいんです。それが許されない場所であればあるほどに」。

四国こどもとおとなの医療センターで2015年9月、Happy Doll Projectを開催。この病院では日頃から積極的にホスピタルアートに取り組み、「アートを媒体にして院内により豊かな医療空間を創出してゆく」ことを目指している。

Happy Doll Projectの様子。このプロジェクトを主宰する高橋雅子さんは、ドールができあがると必ず皆に作品を紹介する時間を設ける。

もり・あいね
四国こどもとおとなの医療センターホスピタルアートディレクター。NPOアーツプロジェクト副理事長。写真家。1972年徳島生まれ。大阪芸術大学写真学科卒。2007年NPOアーツプロジェクト所属。2008年国立病院機構香川小児病院の壁画制作をきっかけに各種アートプロジェクトを手がける。2012年に開院した四国こどもとおとなの医療センターでは建設段階よりアートを全面的に取り入れ、現在はホスピタルアートディレクターとして勤務。

アフリカや東北の被災地でも活動を続ける高橋さんの言葉は深い。病院のアート活動の根底はそこにあると常々私も感じている。病院で入院手続きを済ませた途端に人は「患者」になる。さまざまな制約ができ、数字で管理され、それまでの生活スタイルは一変してしまう。最良の治療を受けるためにはそれは仕方のないことかもしれない。だけど、それだけでは足りない。人は物理的に不具合のあるところを切り離せばすっかり元通りになるようなロボットではない。私たちの心は食べ物や寝る場所さえあれば満たされる。という単純な回路を持たない。私たちは患者である前に皆違った考えや背景を持った人間なのだ。人として違いを尊重される時間、今この時を共に楽しめる時間を医療現場に届けること。届けることが困難な場所だからこそ届ける価値があるもの。それがホスピタルアートであり、高橋さんの活動なのかもしれない。

帰り際、同行されていたカメラマンの方が、「あの男の子、私と同じ病気みたいなんです。私のフクロウの写真集を見ながら一生懸命フクロウの人形を作ってくれました」と嬉しそうに話してくれた。そのフクロウは力強く唯一無二の存在感で輝いていた。その人形を見たカメラマンさんも、看護師さんも私も、多分その場にいたすべての人がその人形から何らかの励ましを受けたことだろう。励ましを与えようとして訪れたものが逆に励ましを受け満たされる。これも相方向のエネルギー交流を生みだすアートだからこそできる特別な魔法なのかもしれない。高橋さんの信念がこれからも多くの人々を巻き込みながら物語を紡ぎ続けることを心から願っている。

この日の記録撮影をしたカメラマンの黒須みゆきさんは、『ふくろうデイズ』という写真集を出している。それを見ながら、ドールをつくった男の子がいた。

右が筆者。Wonder Art Productionの高橋さんと。